

宇喜多家中に見る豊臣政権の実態

谷口 央

はじめに

豊臣政権は秀吉の死後わずか2年で事実上の政権崩壊となる関ヶ原の戦いを迎えることになった。その中でも西軍の主力であった宇喜多秀家は、その後八丈へ流されることになったが、なぜわずか2年という短期間で豊臣政権は崩壊したのであろうか。またなぜ秀家は敗れることになったのであろうか。豊臣政権の実態と宇喜多家中の実態をつなぎ合わせて考察することにより、これら2点の疑問を史料より解き明かしてみたいと思います。

1 宇喜多秀家と豊臣政権(宇喜多秀家ってどんな人?)

i 秀吉養子＝関白秀次・秀家(元龜3年(1572)生)・秀俊(後の小早川秀秋天正10年(1582)生)

1天正20年(1592)に始まる朝鮮出兵の出兵隊総大将(秀次は日本の関白として京を守備)

2史料1「大唐関白、右如被仰候、秀次江可被為讓候、(中略)日本関白ハ大和中納言・

備前宰相(=秀家)兩人之内覚悟次第可被仰出候、

「高麗之儀は、岐阜宰相(織田秀信)歟、不然者、備前宰相可被置候、」

⇒天正20年5月段階では、秀次に次ぐ身内 注)大和大納言＝弟秀長養子秀保(天正7年(1579)生)

ii 文禄2年(1593)8月、秀頼誕生

→文禄3年：秀俊は小早川家へ養子(11月毛利元就養女と婚儀)

秀保は急死(一説には毒殺とも)

文禄4年：7月秀次事件により、豊臣秀次切腹

史料2「不断致在京、御ひろい様(後の秀頼)へ御奉公可申候、自然用所候て下国之時ハ、家康・輝元かハリ／＼に御暇申上、可罷下事、」(三人連署)

史料3「不断致在京、御ひろい様(後の秀頼)へ御奉公可申候、私として下国仕ましき事」(個別)

⇒後の「五大老」の中で秀家と前田利家(＝秀家義父)だけは別格(但し秀家のみ若年)

cf文禄4年時の5人の年齢(数え年)

徳川家康53歳・毛利輝元43歳・小早川隆景62歳・前田利家58歳・宇喜多秀家24歳

iii 有力家臣の知行安堵(文禄3年(1594)9月)

史料4：秀家判物に豊臣秀吉朱印が袖に付く

⇒「取次」ではなく、直接秀吉が対応する(他家にも例有り)

2 宇喜多家中に見る「検地」と「朝鮮出兵」の実態

i 太閤検地の目的

史料5「知行方令検地、台所入丈夫ニ召置、在京之賄相続候様ニ可申付事」

cfちなみに検地奉行は宇喜多秀家。

「其上検地之儀、会津者中納言、白川同其近辺之儀者備前宰相ニ被仰付候事」(浅野家文書)

史料6「其方台所方不如意旨被聞召及候之条、大隅・薩摩両国寺社領事落取、蔵入ニ可被申付候、」

⇒①家中に対する権力強化 ②(①の達成後)秀吉への臣従強化 ③大名の経済的強化

ii 宇喜多領での検地

史料7「備前・作州・播磨・備中迄領国残らず新に検地を入れて、家中の領分を過半あげ、又寺社領多く止められて二十余万石を打出しける、家中其外、國中難儀いはんかたなく、此事につきて、老臣以下不平の事出来、已に弓矢になるべき事などありし程也、」

☆記録史料のため、参考程度ではあるが、検地の実態は i と同質カ (以下検証)

史料8・9の比較

	天正16(1588)総数	天正16年(小幡寺のみ)	文禄4年(1595)
田	7町30代	2町9反15代	1町5畝9歩
畠	1町7反15代	2反35代	2町2反28歩

注)1代=1反の1/50

1畝=1反の1/10

・寺社領の削減(自作地のみを認める)+蔵入強化(前年に太閤検地と同内容の検地有)
⇒東北(伊達政宗)・九州(島津義久)領国の実態とほぼ同等の検地と言える。

iii 朝鮮出兵と宇喜多領国

史料11：伏見城普請の材木京上=家臣への強制へ

史料12：「高麗陣夫」の農民への負担(転嫁)と「新荒・古荒・逐電」の多発

cf全国的な状況：史料13・14 ⇒民衆の政権離れとその結果(人員不足)の荒地化

3 宇喜多家の御家騒動

i 騒動の実態

史料15「中村次郎兵衛、去五日夜相果ト云々、此故ハ此比備前中納言、長男衆ヲ背テ忝之故ト云々、主者牢人也、定而中納言殿以前不苦之間、形少エ可出ト云々、備前ニハ不白と了松下人一兩人して留守ヲスルト云々、上下七十人ホト之者共、一時ニ聴比事分散、絶言語」

①すでに牢人(浪人)していた者が伏見宇喜多邸を攻撃

②「長男衆」は「備前中納言」と対立

史料16「惣別秀家御仕置にてハ国家不相立とハ天下悉しりふらし(知りふらし)申事ニ候、」

③「戸川肥後・浮田左京・花房志摩・岡越前・檜村監物(史料7)」が「長男衆」の首謀者

ii 騒動の原因

①史料7：宗教問題(光成準治氏により否定：宇喜多家に残った宇喜多河内守が日蓮宗)
=日蓮宗信者が追放・キリシタンが家中存命とする説に反する

②新旧家中対立(譜代家臣の対立・豊臣派對非豊臣派)説

史料10：文禄3年(1594)検地奉行=宇喜多河内守・宇喜多土佐守(共に秀家期新参家臣)

史料9：文禄4年(1595)検地奉行=長船紀伊守・岡越前守・富川肥後守(直家以来の旧臣)

=両者並立の支配体制であり、新旧対立は困難(特に長船から職の区分も想定できない)

→史料16により、旧臣と当主(秀家)自体の衝突では？

③検地・朝鮮出兵など豊臣政権の政策(宇喜多家の場合は秀家が直接実行者)に反対した土豪層の反発

=中世から近世への領主的変化へ対応できなかったため(上記「検地・朝鮮出兵」に対応)

★宇喜多家は、中世以来の土豪層の集団であったものが、領地の移動が無い中で、豊臣氏を背景に当主権力を強化しようとしたいわゆる豊臣大名(中世の土地との関係は極めて密接的であった＝兵農未分離＋自作地の存在(豊臣期から徐々に削減され、江戸期にはすべて消滅)

＝九州島津義久・東北伊達政宗も同類⇔徳川氏(関東へ)・多くは豊臣期に成長した大名

※では、このような問題は全国的に見てどうなのか？

4 豊臣政権と「取次」・太閤検地

・「取次」とは？

①豊臣政権の政策伝達役であり、各大名別の担当有(cf島津＝石田三成、伊達＝浅野長吉)

☆この中で最も中心となった人物(＝政権の政策実施者)が石田三成(他に上杉・最上)

②単なる「取次」ではなく、絶対的な権限者

cf島津氏の場合

史料17:「御家来衆之無沙汰を堅固ニ御法度被仰達、以其上三成御入魂尤候」

史料18:文禄3年(1594)9月島津領太閤検地：検地奉行は石田三成

①大幅な給地削減(＝大名の経済的強化)

②三成と伊集院幸侃(島津重臣＝光秀とのパイプ役)により決定

③大名への忠節奉公のみが加増の対象(＝大名の権力強化)

④大名側の担当者は、その権限を背景に大名家中で政策を実行(権力集中)

⇒豊臣政権の具体的な実行者となり、家中騒動の主役へ

史料19:「幸侃の事、京儀あん内者の事にて候」(大名側の担当者も同様に権力集中)

⇒家中騒動＝伊集院幸侃誅殺事件＋慶長4年(1599)庄内の乱の勃発

cf伊達政宗の場合：太閤検地により家臣給地の減少＋出兵のための動員加重

⇒豊臣政権の政策を受け入れた結果(検地と朝鮮出兵)、主に旧臣(重臣)の離反へ

天正18年(1590)に始まる奥羽仕置(検地・刀狩・破城)は「取次」浅野長吉を中心に実施

遠藤宗信：文禄元年(1592)離反(その後病死)

伊達成実：慶長元年(1596)離反(復帰)

伊達(国分)盛重：慶長元年(1596)離反(復帰)

片倉(小十郎)景綱：慶長4年(1599)離反(復帰)

茂庭綱元：文禄4年(1595)に強制隠居へ

史料13・14:伊達政宗自身が「取次」への反抗(政権中枢にいないからできた?)

むすび

i 御家騒動は宇喜多秀家に限ったわけでない(島津・伊達など)

ii 御家騒動が起こった家の特徴は、旧来からの領地を持ち、そこから移動しなかった大名家中(島津・伊達・宇喜多etc)

iii 御家騒動は豊臣政権の政策実行への大名家臣団の反対運動

iv 同時にその実行者である「取次」(三成を中心とするいわゆる五奉行と言われた者)への抵抗運動でもある(宇喜多の場合、秀吉親族でもあり、秀家自身が実行者)

＝政権としての組織が無く、権力集中が見られ、しかも政権政策自体への抵抗運動が多発

v 特に朝鮮出兵のために太閤検地はおこなわれたが、それに民衆は抵抗(政権基盤の崩壊)

＝豊臣政権の維持はもはや不可能な状態だったとも言えるのでは

★朝鮮出兵での朝鮮半島と秀吉をつないだのが、三成を中心とするいわゆる「五奉行」
→反三成派の結成へ＝その中心として五大老の家康が担がれたのが関ヶ原の戦い
＝毛利氏との戦後交渉は、黒田・福島により実施(その後、五大老筆頭として家康が裁定)
☆抑え役の前田利家の死直後に三成暗殺未遂(福島正則・黒田長政・加藤清正などの東軍主力)

参考文献

- 『岡山県史』近世1、1984年
光成準治『関ヶ原前夜』(NHKブックス 2009年)
大西泰正「秀吉死後の宇喜多氏」(『日本歴史』第727号、2008年)
同「宇喜多秀家論」(『史敏』2009春号、2009年)
同「宇喜多氏の家中騒動」(『岡山地方史研究』109号、2006年)
しらが康義「戦国織豊期大名宇喜多氏の成立と崩壊」(『岡山県史研究』第6号、1985年)
久保健一郎「「境目」の領主と「公儀」」
(岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』、岩田書院、2000年)
森脇崇文「豊臣期宇喜多氏における文禄四年寺社領寄進の基礎的研究」
(『年報赤松史研究』2、2009年)
片山正彦「天正後期秀吉・家康の政治的関係と「取次」」(『日本歴史』第721号、2008年)
山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』(校倉書房、1990年)
同『天下人の一級史料』(柏書房、2009年)
北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(校倉書房、1990年)